

# オプション教材ミズキ 暗唱長文集



## ●暗唱の手順 1 日分

・ 1 日目は、まず、**1**の文章を30回音読します。最初の数回はゆっくり正確に「てにをは」などを間違えないように読みます。

正確に読めるようになったら、ある程度早口で棒読みで、句読点などであまり息継ぎをせずに読んでいきます。

イスにきちんと座って読むと読みにくい場合は、歩き回りながら読んでもかまいません。

お母さんやお父さんは、読み方の注意などは一切せずにただ優しく褒めるだけにしてください。

15回ぐらいでもう空で言えるようになることが多いと思いますが、できるだけ30回続けて読んでください。

なぜ回数を決めて繰り返すかという、と、「覚えられたらよい」という目標でやっていると、暗唱の教材が難しくなったときに、「難しいからできなくなった」ということになりがちだからです。「決まった回数を繰り返す」という目標でやっていると、難しい教材になっても同じように暗唱ができます。

30回音読しても暗唱できない場合は、もう10回音読してください。

これでその**1**の文章が暗唱できるようになります。

それでもできない場合は、暗唱の自習はいったん終了してかまいません。また機会を見てやっていきましょう。

## ●暗唱が難しいときは

暗唱のような短い時間の学習は、夕方にやろうとすると忘れてしまうことがあります。また、毎日同じようにやらないとできるようになりません。できるだけ、朝ご飯の前などに、家族のいる中でやるようにしましょう。

そして、暗唱を毎日やるのが難しい場合は、暗唱の自習はせずに、読書の方に力を入れていってください。

## ●暗唱の手順 1 週間分

- ・ 1 日目に、**1**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 日目は、**2**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 3 日目は、**3**の文章だけを同じように30回音読し、暗唱できるようにしておきます。
- ・ 4 日めは、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すぐに暗唱できなくてもかまいません。
- ・ 5 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 6 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。
- ・ 7 日めも同じように、**1**、**2**、**3**の全部通して、10回音読します。すると、**1**から**3**の全部の文章が暗唱できるようになります。

## ●暗唱の手順 1 か月分

- ・ 1 週目に、**1**から**3**の文章を暗唱できるようにします。
- ・ 2 週目は、もう**1**から**3**はやらずに、今度は**4**から**6**の文章を暗唱します。
- ・ 3 週目は、同じように、**7**から**9**の文章を暗唱します。
- ・ 4 週目は、**1**から**9**の文章を全部通して、毎日4回ずつ音読します。
- ・ すると、1 か月で**1**から**9**の文章が暗唱できるようになります。

## ●暗唱の活用

・ 暗唱のコツをつかむと、自分の好きな本の1部を暗唱したり、英語の教科書を暗唱したりできるようになります。また、覚えるつもりがなくても、物事が頭に入りやすくなります。

## ●より詳しい説明は

より詳しい暗唱の仕方は、「暗唱の手引」(<http://www.mori7.net/mori/mori/annsvou.html>)をごらんください。

1 白い杖をついた目の不自由な老人が、階段を登ろうとしてとまどつていたとき、手助けをするとしたらどうすればよいのだろうか。手を引っ張ってあげるといのは、実はあまりよくないらしい。後ろからそつと支えるようにして進行方向を誘導してあげるのがいいのだと言う。2 確かに言われてみれば、自分がその立場にいたら、そういう手助けのされ方が安心するだろう。手助けにも、コツが必要だということだ。

しかし、そういう手助けのコツがひとつの話題となるぐらい、手助けをしたりされたりする機会が、現代の社会には増えた。3 だれでも、自分ひとりで生きていくわけではない。互いに不足を補いつつ助け合つて暮らしていくのが、社会の自然の姿だろう。

このように考えると、手助けは当然よいことのように思えてくる。勉強について考えてみてもそうだ。4 父に聞いた話だが、昔の数学の勉強の仕方は、わからない問題があると、それを何時間でも考えるところが普通だったらしい。父も、丸一日考えてやつと解けたときは感動したと言っていたが、今は、そういう勉強の仕方をする人はまずいない。5 わからないときは、解法を見て解き方を理解するか、解法を見てもわからないときは、先生に聞くというのが最も能率のいい方法だということになっている。困ったときは助けてもらう、というのは、個人にとつても社会にとつても無駄のない方法だ。

6 だが、人間は、能率のために生きていくのではないという考えもある。父のように、だれの助けも借りずに丸一日数学の問題を考えたというのは、時間の無駄と言え言える。7 しかし、その経験を通して自分の力でやりとげるとい自信を身につけたとすれば、それは能率よりもつと価値あるものを手に入れたとも言えるのではないか。

日本で初めて自動車を作った豊田佐吉は、アメリカに手助けしてもらうのではなく、日本独自の技術で作ることにこだわった。8 この精神が、その後の世界一の自動車作りに結びついたとも言えるだろう。

このように考えると、手助けをすることがよいか悪いかという問題よりももつと大事なことは、その手助けを受け取る自分の姿勢だということになる。手助け自体には、よいも悪いもない。9 その手助けを受けて仕事の能率を上げるというのは、自分の姿勢である。

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

逆に、手助けを受けて、努力をさばるというのも自分の姿勢次第である。それは、手助けを拒否する場合にも同じことが言える。大事なことは、手助けそのものではなく、手助けに対する自分の心構えなのである。

0  
(言葉の森長文作成委員会 M)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

1 インターネットの世界は、今大きく変わりつつある。それは、ひとことで言えば、結果オーライの世界になりつつあるということだ。インターネットを支えるデジタル情報の技術は、デジタルという性格上、きわめて厳密な計算を可能にした。2 途中の過程で一単位の誤差もないような計算を積み重ねた結果、最後の結果がぴったり合うというのが当初の考えだった。しかし、一日に流れる情報量がテラバイトという単位になると、そのような考えでは現実にはそぐわないということがわかってきた。3 今の検索エンジンけんさくは、必要な情報が正確にどこにあるかを指示することはできないが、大体、どのへんにあるかを示すことはできる。そして、多くの人の現実のニーズはそれで十分である。

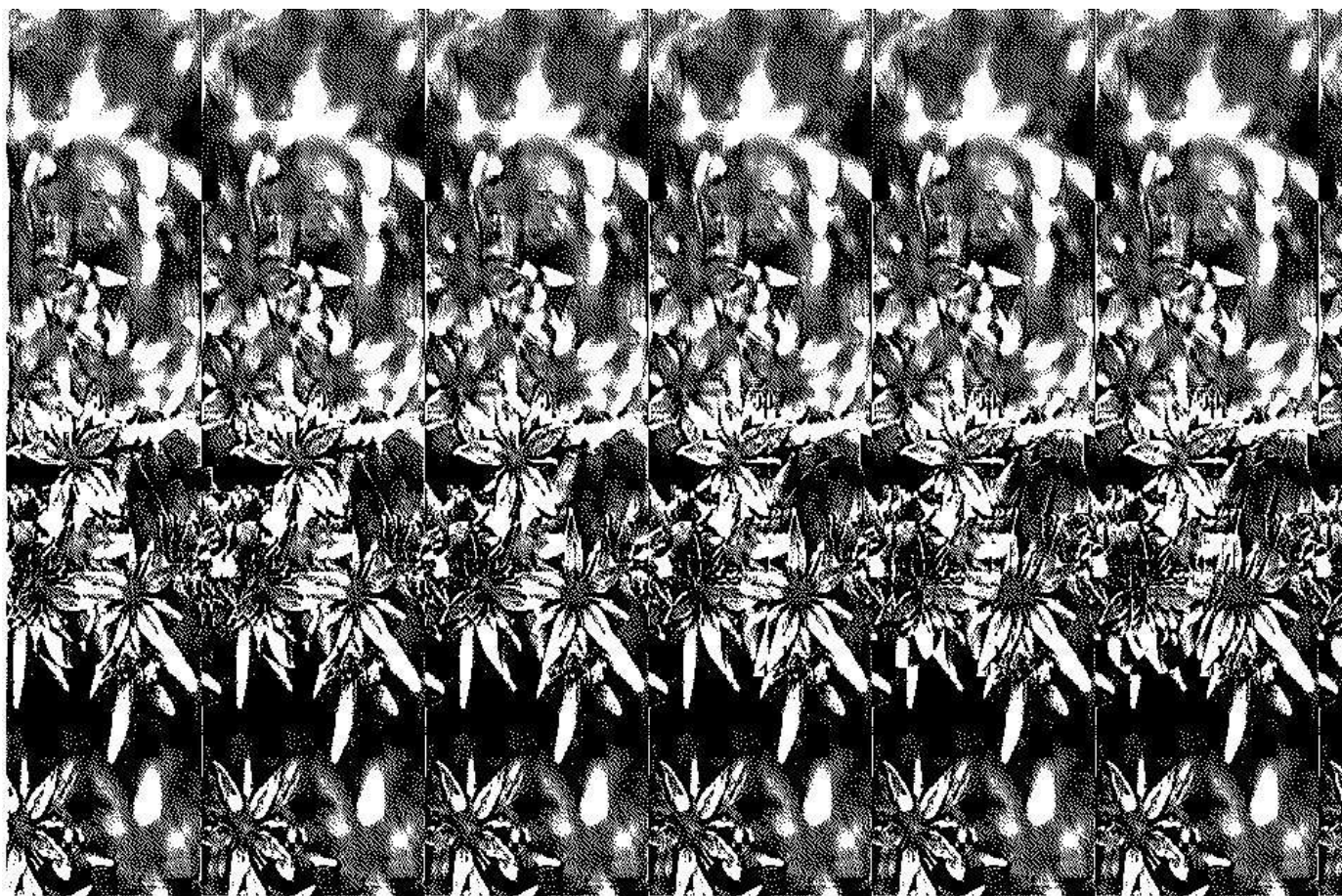
結果を重視するという考え方は、欧米おうべいの伝統に根差している。4 「勝てば官軍」とは日本のことわざだが、日本人はこれを「だから勝つことが尊い」という結果重視の考え方と取るよりも、「だから勝つたものには従うしかない」というあきらめの気持ちで受け取ることが多い。5 「結果は手段を正当化する」という考え方は、日本人にはあまりなじまないようだ。しかし、この結果がすべてだという考えは、勝負の世界では勝敗を決定づけるスピードとパワーの源泉になる。

6 過程を重視する考えは、しばしば、「汚く勝つよりも美しく負けた方がよい」という美意識につながる。日本文化には、この過程重視の伝統が流れている。「人事を尽くして天命を待つ」という言葉には、途中の過程さえ納得できれば、結果は問わないという一種の悟りにも似た感覚がある。7 この過程を尊ぶ考え方が、日本社会の独特の調和を生み出してきたとも言える。つまり、互いの結論は違っても、腹を割って話したという過程があればだれとでも手をつなぐことができるのである。

8 このように考えると、結果が大事か過程が大事かということは、部分的な問題だということがわかる。過程は、結果にとつての手段だが、より大きな目で見れば、結果こそが過程にとつての手段である。

9 つまり、よい結果を目指すからこそ途中の努力に情熱を傾けることができるとも言えるのだ。そう考えれば、過程も結果も、ともに人間がよりよく生きるための手段だと言えるのかもしれない。0 (言葉の森長文作成委員会 M)

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



1自分がいくつか取れば、相手がそれだけ失う。これをゼロサムの関係と言う。株でも土地でも貴金属でも、安いときに買って高くなつてから売るか、高いときに売りの注文を出しておいて安くなつてから買うかすれば、確実に儲かる仕組みになっている。2しかし、だれかが得た利益は、ほかのだれかが失った損失と等しい。おやつがいくつかあつて、子供が何人かいるというとき、おやつの数の方が少なければ、自分の利益と他人の利益は、ぶつかり合う。3そのときどう行動したらよいかということに、あらかじめ決まった答えはない。個人が自分の利益を追求することで、社会全体が豊かになると述べたのは、アダム・スミスだ。消費者が自分にとっていちばんプラスになるものを買おうとするから、安くて優れた製品が生まれる。4また、生産する側が、できるだけよく売れて利益の上がるものを作ろうとするから、消費者がその恩恵を受ける。そう考えれば、おやつと子供の例でも、いちばん真剣におやつをほしがる子供がおやつを手に入れるという点で、自分の利益を追求することが合理的だと言えなくもない。5しかし、単に力の強い子供がおやつを手に入れる可能性も高いというところに問題がある。一方、他人の利益をまず第一に考えることが、自分の利益につながるという考えも成り立つ。例えば、突然の自然災害などに遭遇したとき、互いに譲り合う社会に暮らしている人の方が被害も少なく復興も早いはずだ。6自然界を見ても、マンボウという魚は一度に三億個の卵を産むというが、それは自分たちが生き残るためというよりも、よじよう余剰の生産力をほかの生き物たちに分けてあげるためだとも考えられる。7自然の世界を弱肉強食だと見るのは人間の先入観であつて、本当は自然界は、譲り合いと与え合いの世界なのだろう。このように見てくると、世の中を自分の利益中心に考えることにも一貫性があるように、他人の利益中心に考えることにも一貫性がある。8大事なことは、どちらを取るかということではなく、自分の利益と他人の利益が結びつく社会の仕組みを作っていくことだ。例えば、自分の利益が他人の利益に結びつくためには、自由な競争状態が、力の強い者の支配する独占状態にならない仕組みが必要になる。9また、他人の利益が自分の利益に結びつくためには、他人

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

の状況が正確に伝わるコミュニケーションの技術が欠かせない。自分の利益も他人の利益もともに増大していく社会は、ほかならぬ人間の知恵によって作ることができるのである。0  
(言葉の森長文作成委員会 M)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34